

⑬ 救援活動の様子



チクシコイ青年団、末広青年団、本町消防団、隣村救護班等の救援活動はめざましいものがあった

家の中に入りこんだ発動漁船を引出してゐる救援隊



【遠藤】 これ、久保田さんの家で、当時すごい大きな家だったんだ。

【室崎】 これは立派な家ですね。

【車塚】 これはどこへんになるんですか。（上記地図で確認）

【遠藤】 久保田さんの家わかるかい。写真のちょっと左側のところ。

【室崎】 筑紫恋から応援隊が来ていたんですね。

【住民】 お世話になった、本当だ。



(場所不明)

「こうした形は未だ良いほうだろう
何故なら 屋根の形があるからだ」とポツンと云った村人の横顔には生々しい
自然と闘ったキズが血をにじませて痛々しくみえた

【車塚】 学校の校舎ではないですよ。

【住民】 違うね。

【室崎】 高畠一美さんが、その日何かの関係で真竜（湖北）に来ていたんですね。

【高畠】 おじいちゃんがね。

【室崎】 渡船は潮が速くて全然出せなかった。だから早くても次の日に戻った。
この写真を見て、手前のワラの様に見えるんですけど、これはうちの
納屋・屋根でないかと言っていた。草があるように見えるんですよ。

【高畠】 家は学校のグラウンドに屋根が落ちていたんだけど。

【室崎】 ちょっとハッキリしないですか。



【室崎】 これ分かりますか。あのつかえ棒は後からかけたもんですかね。

【高畠】 後からかけたもんだね。

【室崎】 崩れちゃうからね。これもこの写真だけじゃ位置はわからないですね。

⑯ 救援活動の様子



(場所不明)

かけ付けて来た人の手に依って早くも整理は開始されて行く

⑪ 流失家屋跡の状況



流失家屋のあと

波の一部は凍って氷原となつてゐる

その氷の中から昨日迄の我家の土台を見出し 思い出の子供のクツは、妻の衣は
と捜しまわる人達の姿には 涙なくみる事は出来ない



【遠藤】 神社がここにあって、沢のところに床屋がある。

【室崎】 あそこの家までは来なかった。前の方はみんなやられたということですね。

【遠藤】 けども、高畠さんの方から2番地の方はそんなに傷んでないね。

【車塚】 今、人立っているところ、家があったのか部材らしきものは、見受けられますけど。

【室崎】 家かどうか分からないけど何らかの建物はあったんでしょうね。

⑱ 倒壊家屋の惨状



こうした惨状の裡にも沈着な行動は 最小限の死傷者を以って難を避け得た事は
全く不幸中の幸いであった
倒壊家屋の惨状である



- 【車塚】 先ほどお話のあった草がたくさん積まれている建物です。
これはソリが写っています。
- 【遠藤】 高畠さんの家でないのかい。草あるし。
- 【住民】 そうだね。
- 【遠藤】 神社があるから位置が合うもの。
- 【室崎】 そうすると潰れて脇に草があるのが何処になりますか。
- 【高畠】 これは前から流されたんだよね。
- 【遠藤】 大きい樽だとかって馬用のでないのかい。
- 【住民】 そうそう。
- 【室崎】 このあたりに馬小屋があったんでないかと思われます。
- 【車塚】 今の通りを挟んで向かい側ですか。
- 【遠藤】 間違いない。神社の位置が合っている。

⑪ 馬も住家を失う



倒壊家屋の間に 住家を失った馬は淋しく泣いてゐる



【遠藤】 あー間違いない。馬がいる。

【高畠】 帰ってきたんだ。

② 町議会議員による現地確認の様子



町議員団は中学校舎に現地町会を開き 岸田町長は熱涙を振って村民を激励、議会は全力を傾注して此の復興に盡さん事を決議 対策委員会を設置して 実行の速やかなるを期した

“百年の歴数が一瞬に廻った”と想わせる床潭村の悲しい思い出の一コマである

【車塚】 ここからは議員の一団が視察をしている場面になります。

【遠藤】 ああの山の状態を見れば結構浜の方から撮っているよ。

【室崎】 これを見ても奥の方にある家は無事なんですね。

【高畠】 はい。

【室崎】 あれで床潭は平らのように見えるけど結構高いところと低いところがあるでしょう。

【高畠】 当時からみたら今はだいぶ平らになった。





よせて来た氷山の群 大波、地震と、三重、四重の為に堅固な倉庫も一たまりなく 全壊の状態となつてゐる

余りの惨状に暫し呆然として術もなく言葉もなく久田議長は立ちつくしてゐた
村民は黙々として言葉一つなく つぶれた家屋、流失し残った家財の少しでもと
集めてゐる

【室崎】 これが久田議長です。

体格のいい人でした。

【車塚】 これは②0の写真と同じ場所になります。



② 浸水家屋の状況



いくらか小高い附近の半壊、浸水の家屋はタタミ干しに懸命だ
生き残った者の感がある
写真はつぶさに視察する町議員団

【室崎】 畳を干しているんですね。

【車塚】 先ほど久田議長が立っていた
ところから、左にカメラを向
けて撮っていたと思われます。



②③ 民家まで押し流された船の状況



波際にあった船が波に押されて此の倉庫に当り 加へて氷の山が押しよせた
写真は屋根と船と氷がかたまつた俵流されて とんでもないところに揚げられた
もの





想わず駆け寄って村人の肩を抱き涙で慰問した久田議長の人間性
 写真は駆け寄る久田議長（背をみせてゐる）



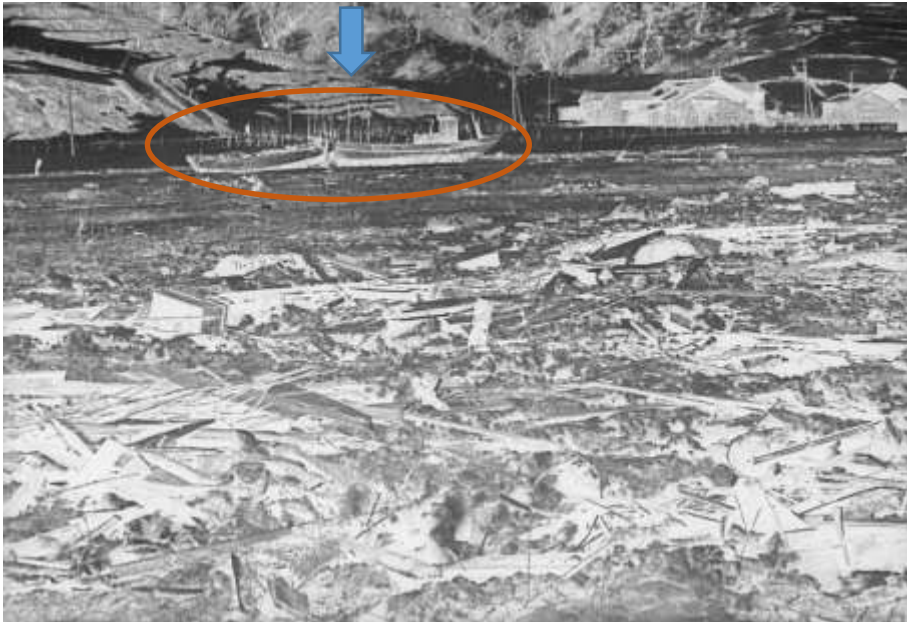
②⑤ 何も無くなってしまった惨状(学校付近からの様子)



ここには何もない 何にもない 家のあともみ当らない惨状だ

地形的に云ふと古川と云って昔の沼に通じた川に当ってゐたところ丈けに急速に引いて行つた波はキレイに引去ってしまったのである

打ち上げられた船



【車塚】 これも遠景なんですが、先ほど見た⑱の建物が写っています。

【室崎】 船がみんな打ち上げられている。

【遠藤】 船が上がっているんだから川を伝っているということなんだね。

【高畠】 そうだね。

【車塚】 船が上がったのは何処になりますか。

【室崎】 背景から見てこれは学校の方ですか。

背景に段々があってその上に上がる道がある。

【遠藤】 写真の手前に学校がある。

【車塚】 学校のグラウンドあたりから撮ってる写真ですか。

【遠藤】 そうだ、学校のあたりからだ。

あの家は三鶴（高畠三鶴）さんの家だ（床屋さん）。

【室崎】 そして道路は焼き場に上がっていく道路ですか。今は焼き場はないですけど。

②⑥ 床潭沼につながる川の跡



海浜より200m以上離れた畑地の中へ此の家屋は押されて来たと村民の一人は指さしてゐた





【車塚】 これも恐らく⑭の所から左側にカメラを向けているという感じです。
奥に見えるのは床潭沼でしょうか。

【遠藤】 手前に潰れた屋根があるね。高畠さんのとこでないの、そこ川なんだけど。
家の屋根だ。あそこに電柱があって、山の位置からぼってけばそこら辺の
位置になる。津波で掘れた訳でない。

【高島】 向こうの白いところはなんだ。平らなところ。

【遠藤】 あっちが沼になるんでないの。
学校の生徒が氷を渡って逃げたというんだから。そして渡り切って間もなく
（津波が）来たというんだから。

【室崎】 その時、厚岸湖に氷が張ってたというから、床潭沼に氷が張っていない訳が
ない。高畠さんの家の方から床潭沼の方を見ているということになるんじゃ
ないですか。それで手前に流れているのが川らしいと。

【遠藤】 川だ、間違いない。あそこの裏山の位置が合うもの。

【車塚】 ここには建物があつたんですか。（床潭沼の奥）

【遠藤】 皆川さんだ。

【車塚】 そうしたら、今道道が走っているのはこの山裾を走っているんですね。

【室崎】 湾月町に出る道は昔からあそこなんでしょ。結構な峠で越後茶屋（注4）
があつて。

【高畠】 そうそう。

（用語解説）

（注4）越後茶屋

床潭から奔渡へ抜ける道は、今でこそ自動車で一息だが、かつては急な峠を越えての遠い道だった。
峠の頂上付近には「越後茶屋」という茶店があった



広野に行く感じがします いくら行っても同じ感じです
無限の想い、無量の情を胸に此の人は只グルグルと宛もなく歩いてみました

【車塚】 これが先ほどの拡大の写真になります。

【住民】 橋がある。左側の方。

【室崎】 船が何隻も入っていますね。

【遠藤】 船もみんな川を伝って上がったんだ。

【室崎】 小さな川でも川がある所はものすごく影響がある。



②⑧ 300m以上流された発動機船



福得丸は発動機船だ

渚より此の点迄は300m以上ある

もうすぐ国道だ

怒り狂った波に彼女はその体を委せたのだ

無さんにも彼女の体はキズダらけとなってる

【室崎】 福得丸となっています。

【遠藤】 清作（久保田清作）さんの船だ。
俺らが厚岸から慌てて戻ってきたら
船が上がってたんだから。

【室崎】 これ、場所はどのあたりですか。

【遠藤】 川伝いの頭の方。

【室崎】 川を伝って沼の近くまで持って行か
れた訳ですね。もう一隻上がってますね。
清作さんと清三さんと御兄弟でしたよね。

【高畠】 そう。

【室崎】 清作さんと清三（久保田清三）さんの奥さんにそれぞれ会っているけど、
写真を見せたときにどちらかが写真を見て泣いたんです。

【高畠】 清作さん大人をおぶって逃げて流されたんだもの。



- 【室崎】 先ずは写真の話をさせて貰いましたけど、いろいろ見ていると当時を思い出されると思うんですが、その時のお話をしていただければと思います。
だいたい地震は10時過ぎに来たんですね。
- 【高畠】 そうです。
- 【室崎】 その時、何をしていましたか。
- 【高畠】 わたしは馬で父さんとおじいちゃんが町に行っていて、お昼に帰ってくるから、その支度をしていた時に地震が来たんです。今でいうと震度7か8位に感じて、立っていられなかったですよ。その時は津波が来るとは思わなかったけど、直ぐ子どもを負ぶって、火の始末をしたりしてたら浜の方から津波来るって誰かが叫んでたので、それで慌てて逃げました。
- 【遠藤】 俺の家内が言ってたけど、学校へ行くために家を出た時に誰かが津波来るって叫んで、それで皆泣いて沼を渡って山に逃げたら、間もなく来たらしい。子どもながらにブワーっと浜（波）が高くなったのを見ながら走ったっていう話だった。
- 【高畠】 本当に船が空についたような恰好になっていたのを見て私は逃げました。その後、後ろをみたらもう家が無くて、私も波につかりました。
- 【遠藤】 今になってみれば学校は流されなかったから、生徒は学校に居れば大丈夫だったけど、その時に学校が流されないという保証はないから。
- 【高畠】 久保田さんのおばあちゃんだったかな、津波来るって言ってたの。
- 【室崎】 地震から津波までの間は時間が無かったんですか。
- 【高畠】 いや、ありました。
- 【遠藤】 かなり潮が引いたらしい。
- 【室崎】 それは津波が来る前に引いたんですか。
- 【遠藤】 年がいった人たちは津波が来ると分かった。
- 【室崎】 それを見て早く逃げろと言った人たちがいたんですね。今と違って警報も何もないですから。津波が来る前に先ず潮が引くってよく言いますよね。
- 【遠藤】 番外地の方から来たらしい。
- 【室崎】 あっちは岩礁で、それが潮が引いて岩の根まで見えたという話ですが。
- 【車塚】 ピリカウタの方が番外地ですか。
- 【高畠】 はい。
- 【車塚】 金比羅さんの周辺は8番ですか。
- 【遠藤】 通称ね、今は変わっちゃったよ。
- 【室崎】 西側から行く訳ですね。8番地は途中で高く上がるでしょ。
- 【遠藤】 そう。我々はキラク街って言ってたんだ。

- 【住民】 関原（関原栄吉）さんあたり。
- 【室崎】 そしてもう少し行くとピリカウタ、小島の前になりますよね。
- 【遠藤】 チリ津波の時は我々は全然大丈夫だった。
- 【室崎】 27年の十勝沖のときはあれだけやられたんだけど、チリ地震の時は床潭に被害があったと聞かないですね。しかし霧多布はものすごくやられた。
- 【住民】 その時の方向によって被害が違う。
- 【高島】 我々のところは黒島の方から来ると被害があるし、小島の三角の方から来れば何ともなかった。
- 【室崎】 床潭はこれだけやられたんだけど、末広（まびろ）、筑紫恋（ちくしこい）はたいしたことなかった。
- 【住民】 そうだね。
- 【室崎】 地図だけをみると、どうして床潭だけがやられるのかと思ってしまう。海の底だとか岩礁だとか全然分からないですから。
- 【遠藤】 末広は黒島の前にあるし、床潭はその間にある。かえって、絞られて強く来たんだ。
- 【車塚】 当日のことで、先日高島さんのお宅に伺った時には、湾月のほうの学校に行ってたんでしたよね。他の方は床潭にいらしたんですか。
- 【高島】 いや町立病院にいた。その時に津波の話を聞いた。
- 【遠藤】 津波が来た時には町にいた。
- 【室崎】 梅香町（病院）から歩いたら1時間はかかったでしょう。心配したでしょう。
- 【車塚】 床潭の小学校は実際に津波は襲って来なかったんですね。
- 【高島】 校舎に波は入らなかったです。
- 【車塚】 当時の子供たちの作文で、津波が来たぞと声がかかって、窓から飛び降りて逃げたと書いてありました。
- 【遠藤】 うちの家内が言ってたが、浜のほうでどこかの母さんが津波来るって叫んでそれで逃げて、氷の張った沼を渡り切って間もなく津波が来たっていうんだ。
- 【車塚】 氷を渡って、高島さんの方から見た斜面。火葬場のある方に逃げたんですね。
- 【住民】 山まで行くにはそこしかないから。
- 【車塚】 その後、そこで避難生活が始まると思うんですけど、何日間位山の上に居たんですか。
- 【高島】 3・4日いた。
- 【遠藤】 何日もいた。たまに片付けに下がるけど、夜になればおっかない（怖い）から、俺なんか火葬場の小屋に泊まった。
- 【室崎】 余震がだいぶ続いたみたいですね。
- 【車塚】 避難中の食事はどうしたんですか。

- 【多田】 水は山から流れる水を利用して、鍋はあるから山から木を持ってきて、焚き火で飯を炊いていた。
- 【遠藤】 本当に落ち着くまでは結構かかった。
- 【室崎】 多田さんの当時中学校2年生の文章によると、家の中で寝ることもできず、山の中で小屋を建てて野宿したと書いていますね。どういう小屋を建てたんですか。
- 【多田】 ただ棒を4本立ててムシロを張っただけの小屋だった。
ムシロを何枚も使って3日か4日過ごした。夜中になんかカサカサ鳴って、誰かと思ったら警察だった。夜回りしてたんだ。
- 【車塚】 避難して元の生活に戻るのには家ができて戻るんですか。何処か親戚の家とか。
- 【多田】 どこか家を借りたんでないのかな。家は直ぐに建たないもの。
- 【遠藤】 片付けもだいぶかかったし、片づけてからバラック建ててくれたのが何件かな。俺もバラックに入ったもの。川の辺りや浜にも建った。
- 【車塚】 それは誰が建ててくれたんですか。
- 【住民】 役場だ、町が。
- 【室崎】 とにかく町が窓口になって、早急に入れる家を建てないといけなかったわけですね。
- 【車塚】 生活できるようになるまでは長い期間がかかったんですね。
- 【住民】 かかった。
- 【室崎】 あのがれきを片付けるだけでも大変ですよ。今と違って重機もないですし。
- 【遠藤】 災害ということで、人の手を借り、町や村の人皆にお世話になった。一人で出来るもんじゃないから。
- 【車塚】 そういう時は馬は貴重な戦力だったんですか。
- 【高畠】 それは無かったです。馬は何にもできない。でも10日ぐらい過ぎてから、用を足しに馬で出かけるようになりました。うちはきれいに無いんだから。
- 【室崎】 バラックって何件位建ちました。
- 【高畠】 うちのところは、うちと、久保田さんと高野さんの3件だった。
- 【室崎】 10件位家が流されて、とにかく応急のバラック（仮設住宅）を建てたんですね。最終的にはそれを払い下げにして倉庫に使ったりしていたんでしょうけど。
- 【遠藤】 家が完全につぶれて無くなったという家は何軒もなかった。8番地の方だってそんなにないんだ。みんな形は残っていた。
- 【高畠】 完全に無くなったのはうちだけだったんじゃないだろうか。久保田さんも高野さんも、下はやられたけど上はあった。
- 【車塚】 避難するときに、例えば高島さんの自宅の裏は急こう配もありますけど、

あっちにも逃げた人はいるということなんですよ。

【高畠】 いたね。

【車塚】 てんでバラバラに逃げていく感じでしたか。

【遠藤】 我々はやっぱりここだ。こっち側の俺の本家の牧場。

【多田】 俺は遠藤さんの牧場の方へ上がっていた。

【室崎】 今と違ってここが避難場所ですということは何もやっていないでしょ。

【住民】 何もないです。

【室崎】 津波は知識としてみなさん知っているでしょうけど、現実の津波に会ったのは戦後これが初めてではなかったでしょうか。明治の初めころにはあったかもしれないですが。

【住民】 そうだね。

【室崎】 やはりある程度年配の方が、地震のあと波がスーっと引いたら津波になるという知識は持っていて、だから逃げろと言ってくれたわけですね。

【車塚】 作文の中にもでてきますね。お父さんがそう言っていたという。

【車塚】 もうだいぶ前になりますが、他の地方で大きな地震があった時に海岸に避難した人たちがいました。津波がどういうものなのか全然伝わっていなかったということですね。そういう意味では、床潭の場合は“逃げろ”と言ってくれた人たちがいたことが、被害を最小限に食い止めたということなんですね。

【遠藤】 そういうことだね。

【室崎】 これだけ大きな災害で亡くなった方が2人というのは、むしろ奇跡的なことだと思います。

【遠藤】 小松さんの家は流されなかったけど、おばあちゃんが子どもを負っていたから亡くなった。

【室崎】 浜に氷があり、その氷が波と一緒に流されて家を壊したということがあったのでしょうか。

【遠藤】 そうだと思う。護岸も何もないから、上がってはまた次の波で流されて山になっていた。

【室崎】 波は何波も繰り返したんですね。

【遠藤】 そうそう。

【室崎】 その氷に遮られる形で助かったわけですね。沖に流されないで。

【遠藤】 俺のおふくろはそうだった。そこでひっかかった。子どもを抱いて

【米内山】 先ほど郵便局の裏と保育所の裏に学校に行く橋が見えました。私は新しい床潭小学校を建てる時に担当をしていて、この川に津波が登ってくるのでこの側に建ててはだめなんだと言われていましたが、今お話を聞いているとやはり川を伝って津波が登ってきたということなんですね。

- 【国井】 2名の方が亡くなられたということで、その方は何をしていた逃げ遅れたのか分かりますか。
- 【遠藤】 やっぱ子供がいたりして出遅れたんだと思う。うちのお袋（裁縫の先生）は結果的に助かったけど、残った子供がいないかどうか確認したりして逃げ遅れた。生徒たちは窓から飛び降りて逃げ、親父は純子（遠藤弘さんの妹）を抱いてばっと出たから何もなかった。
- 【車塚】 負んぶしていた赤ちゃんだけ死んだんですか。
- 【遠藤】 小松さんはね。家が崩れて下敷きになったという話だった。
- 【車塚】 あともう一人、久保田さん（久保田清三さんの兄）はどうだったんですか。
- 【高畠】 足がちょっと不自由だった。弟さんが負ぶって逃げたんだけど、橋の所で流されて、転んだので負ぶった人だけずっと上の方に流された。だいぶ探したけど。負ぶっていた弟さんは助かった。
- 【車塚】 やはり川伝いに流された。
- 【高畠】 そうです。
- 【熊崎】 学校は何ともなかったんですが、津波が押し寄せてくる方向はどこからだったんでしょうか。
- 【高畠】 真正面から川伝いに。波が天井に着くようだった。私は逃げてこちら辺まで濡れたけどギリギリだった。橋から島田さんのとこまで上がったらもう波は来なかった。
- 【遠藤】 ひどいもんだな。あれだけのちょっとの高さでな。
- 【車塚】 津波がくるぞと声がかかって。大黒島と小島の間から来たとか、潮の流れは分かりませんか。
- 【高畠】 それは分からない。そんな余裕はないない。
- 【遠藤】 小島の人が川湯から帰ってきて、渡ろうとしたっていう。ところがすごい潮だったので渡れなかった。
- 【室崎】 小島には波は上がらなかったんですね。
- 【遠藤】 小島はチリの時も裏山に当たったけど、逆だったら大変だった。
- 【室崎】 今回の話で、川や高畠さんの家、建物等の位置が概ね確認できましたし、波が来た方向も検討がつかしました。今日は貴重なお話をしていただき本当にありがとうございました。

<資料1> 厚岸町史聞き取り調査記録（平成13年8月）

○ 厚岸町史聞き取り調査

日時及び場所 平成13年8月16日（木）

厚岸町役場 床潭東側視察 床潭漁村センター 床潭小学校付近視察

床潭西側視察（高島さん裏山付近） 床潭末広道路高台より床潭全容

床潭末広道路経由、厚岸町役場

内容

① 開会（事務局）

② 参加者紹介

厚岸町史編集委員会紹介（敬称略）

室崎正之 池田敬治 佐藤宥紹 佐々木翼 中島弘美 宮崎和子

床潭自治会参加者紹介（敬称略）

高島 昭 高畠キ工 須崎 薫 中村武雄 竹ヶ原フミ 高橋高德

久保田清三 久保田キク 田海ミワ 小島政男 佐藤 喬 吉川由松

③ 内容（司会進行、【佐藤委員】）

「昭和27年3月の十勝沖地震・津波の被害について」

④ 閉会（事務局）

【佐藤委員】 今日は二つのことを考えてきました。一つは、1952年3月4日の午前10時20分頃に起きた地震に関する記録づくりをしています。一時間くらいでお話しがはずめば、そちらを中心にしたいと思っています。それから、昭和35年の5月にチリ沖地震の津波があったと思いますけど、その時のことを伺って参りたいというのが第一点であります。第二点は、昭和27年3月4日の暮らしというのを取材したいと思っています。時間がなければ無理しないことにいたしますけどもその二つのことを進めさせて頂きたいと思っています。こちらの方は40分くらいとおっております。一番最初に昭和27年の3月にどこにいたかということをお聞きしたいと思っています。今日お話ししてくださるのは久保田さんからこちらの方とのことですが、こちらの方も自治会関係など覚えていらっしゃる方もいるかと思うので、皆さんにお聞きしたいと思っています。ここに簡単な図面を作りました。須崎さんからどの辺においでになったかということと、何歳くらいだったか教えて下さい。

- 【須 崎】 私は、今ちょうど70歳なので、49年前だと21歳ですか、地元でした。沼の脇に学校がありますね、今の校舎から100メートルほど西にずれたところに校舎があった。
- 今の校舎の道路を挟みグラウンドを挟んだ西側にあったのが学校で、僕の家は、道路沿いのもう少し西側、学校の今の道路より100メートルくらい行った所に川がある。
- 今の沼のほかにもっと小さい沼があって今もなんぼかある。それから川が流れている。大きい川が流れているのではない。
- 【高 島】 家は須崎さんから、約2、3百メートルくらい西寄りです。
- 【久保田】 私は、当時は西側のはずれの方にいたんですよ。
- 山沿いの方に。今は中間に住んでいます。
- 【中 村】 私は、東側です。高畠さんの向かいです。
- 神社通りのちょっと上に家があった。
- 【高 畠】 私は学校のすぐそばで、道路のすぐそばです。
- 【久保田】 高畠さんの筋向かいにあるんです。道路の脇で高畠さんの南側です。
- 【竹ケ原】 私は当時、神社から100メートルくらい東側。
- 【高 橋】 私は東側、小松さんが隣にいた。山の下の方。
- 【田 海】 須崎さんの隣、西側の隣で。
- 【小 島】 東側。崖の下のところ。
- 【佐 藤】 小島さんの手前側西側のところ。
- 【佐藤委員】 吉川さんの家は。
- 【吉 川】 宮下さんの下の方に。
- 【佐藤委員】 須田さん。
- 【須 田】 小松商店の船揚場から100メートル沖にいました。ホッキ巻きをしてました。
- 【佐藤委員】 小松商店はどこにあるのですか。
- 【須 田】 今やってないですけど、当時高橋さんの隣、手前。
- 【佐藤委員】 そうすると須田さんは、ここでホッキをやった。家はどこだったんですか。
- 【須 田】 筑紫恋です。
- 【佐藤委員】 一番地、二番地、三番地と番号がついていた。大きくいってどちらの方向からですか。
- 【不 明】 西側からですね。
- 【佐藤委員】 何番地までですか。
- 【不 明】 8番地まで。9番地っていう人もいたけど、8番地です。
- 【佐藤委員】 ここの家は何番地とかはわかりますか。久保田さんの家は何番地と言ってましたか。

【久保田】 4番地。

【佐藤委員】 竹ヶ原さんの家は。

【竹ヶ原】 6番地と言っていた。

【高橋】 うちが6番地。

【小島】 8番地。

【佐藤委員】 田海さんと須崎さんは。

【田海】 3番地。

【高畠】 4番地。

【久保田】 1番地。

【須崎】 3番地。高島さんのところが2番地。

【佐藤委員】 だいたい見当はつきますね。それでは、ここまでのことで補充すること
あります、このことを聞いといてくださいというのは。
あと、今無くなった郵便局は今の位置でいいですか。消防番屋みたいの
は無かったですか、消防番屋は今の位置と変わっていますか。

【不明】 今の消防番屋の脇に駐在所があった。

【佐藤委員】 今の消防番屋の脇が駐在所。それからお寺があって神社があって、お店
は2件。小松さんと宮下さん。

【不明】 何軒もあった。5軒くらい。

【佐藤委員】 何軒もあった。組合は無いですね。だいたいこんなもんですか。
ちなみに現在の消防ってどこにありますか。

【不明】 宮下商店のところ。

【佐藤委員】 じゃあ、ここに駐在所があった。何年くらいまでありました。

【不明】 津波の時はここにあった。保育所のところにあったがすでにこっちにき
ていた。
消防の小屋っていうのは無かった。当時は、火の見櫓というのか、その
程度だった。

【佐藤委員】 このとき床潭の村ってだいたい何戸くらいありましたか。

【不明】 漁業を営んでいた人のほか、あの当時番屋に住んでいた人が相当いたか
ら150～160戸くらいあったのではないか。

【高橋】 170戸。うちで豆腐屋やっていたから、170位あった。

【不明】 今と変わってない。

【不明】 漁業経営者は全体から見ると少ない。

【佐藤委員】 それでは話を絞りまして、3月4日午前10時20分です。
今にして思えばなんか変わったなあと思うことがありましたか。
地震の予知につながる様なことが。

【須崎】 須田さん沖に出て地震来たのは分かった。

- 【須 田】 わかりました。ちょうど浅いところだった。二尋半（注1）くらいのところ。船のロープが延びて縮んだりして、それが地震だった。それから陸みたら、ちょうど遠藤さんの家が見えて、その縁々に積んであった薪がみんな崩れたそれで地震だとわかった。
- 【佐藤委員】 須田さんは、海でホッキをひいていた。（注2）
ロープは船を止めてるもの。
- 【須 田】 漁具です。貝を引き寄せるための綱のこと。
- 【佐藤委員】 海老けた綱、ホッキけた綱漁具みたいなもの。
- 【須 田】 そうです。
- 【佐藤委員】 けたを引っ張る綱が延びたり縮んだりしておかしいなと思った。それが海にいた時の地震だった。薪が積んであったのが崩れた。
- 【須 田】 海岸を見たとき。
- 【須 崎】 須田さんの見える向かいに遠藤さんといって、その当時、若い子供さんがいた。その女の子たちが、二階から飛び降りた。
- 【須 田】 窓から5人も6人も出た。遠藤さんという家で、そこのお母さんが裁縫を教えていて、教室が二階で、女性たちが窓から5～6人出てくるのが見えた。だいたい岸から100メートル。離岸堤のあたり。
- 【佐藤委員】 山鳴りしたとか、雲がおかしかったとかそういうことはなくて、突然地震が来た。
- 【須 田】 そうですね。
- 【佐藤委員】 それでは家にいた人。3月4日午前10時24分頃こういうのは覚えているっていうことは。
- 【不 明】 私は、津波、波を見たんですよ。
- 【佐藤委員】 波を見た。まずは地震の時。
- 【不 明】 私は家にいました。地震だなと思って玄関出たらちょっと止まったような感じだった。もう終わったと思って家に入ったらまた揺れてきた。母がいて、母があまり丈夫で無かったから、抱える様にして引っ張っていった。私は、お腹に子供がいて、その子が3月の7日に生まれたんです。そんな調子で母をつれて外までは出たんです。玄関をまたいで出て、それから全然歩かれなくて、そこで二人で座ったきり地震が終わるまで外にいました。
- 【佐藤委員】 家は地震によって倒れたことはなかった。
- 【不 明】 地震では壊れなかった。津波では壊れましたけど。
- 【佐藤委員】 皆さん、家の中でだいたい迎えられたのですか。
- 【不 明】 漁師の人はちょうど2月3月は家にいますからね。
- 【佐藤委員】 暖房は薪ストーブですか。
- 【不 明】 薪です。

- 【高 畠】 我家はルンペンストーブ(注3) でした。昔だからお昼は芋を炊いて食べるんだよね。それから、芋の鍋が煮立っているから旦那が逃げるに逃げられなくて、その鍋を押さえて地震が終わるまでいた。外に出ないで。
- 【佐藤委員】 竹ヶ原さんは。
- 【竹ヶ原】 流しの方は薪でしたけど、馬鈴薯煮てたのは石炭。
- 【佐藤委員】 それに湯沸かしがついていた。
- 【竹ヶ原】 そうです。
- 【佐藤委員】 石炭は三軒くらいであとはほとんど薪だった。
- 【須 崎】 僕はその前の日に、焼酎を飲んでしまって、酔っぱらっていて親に地震だと言われてから起きた。今思うと薪ストーブだったです。そのころ若い人を何人か使ってタラ釣りっていう商売やっていた。その時も8人いて、孫ばあさんもいるから11人家族だった。当時昼は芋で、芋鍋はこんなでかい鍋で、両方に持つところがあり、台所からその芋鍋を砂地の作業場、小屋なんですけどそこまで持って行った記憶があります。
- 【佐藤委員】 須崎さんは、家兼作業場のところで、二尺ぐらいの鍋で馬鈴薯煮ててその馬鈴薯だけを持って出たんだ。
- 【須 崎】 もう揺れているから、危ないから、持たされたというより自分で持って出たと思う。
- 【佐藤委員】 ストーブを押さえたということは無いんですか。
- 【須 崎】 水か何かかけたんでないか、みんなで。
- 【不 明】 中村米吉さんという人が家に遊びに来ていた。地震だって出たんだけどもう階段だったから降りられなくて、煙突が立っている棒につかまってぐるぐる回っていた。そして地震が終わって津波になったら、家のじいさんがルンペン危ないからと言ってルンペンを外へ持って出た。その時にもう津波が来るからもう、ルンペンなんてそのままにして逃げなさいって言ったのは記憶あるけど。
- 【佐藤委員】 火事が出ないようにとルンペンを押さえた方はあまりいないようで、どうかわからないけど水かけたぐらいのことはあったかもしれないということですね。薪ストーブは安定しているからおかまいなしということですかね。それでは、津波にしましょう。核心の部分ですけど。
- 【須 崎】 記憶では地震の後に何分くらいでここに入って来たんですか津波は。
- 【佐々木委員】 町史では約30分となっている。
- 【高 畠】 30分なんてない。地震終わって片付けてちょっとしたらまた地震が来たから出た。出て橋のところに来たら、ルンペンたないで(持って)投げて(投げ捨てる) ひょっと浜見たらもう波が。家のお父さんの妹がたないで投げてひょっと見たら、もう津波といっしょに船が上がってたから30分もない。

- 【不 明】 30分というのは正確な時間でないと思いますよ。
- 【佐藤委員】 記録では、後で訂正があったかもしれないんですが、震度は4というふうに言ってます。
- 【一 斉】 4ではない。全然きかない。
- 【不 明】 7、8もあったのではないか。
- 【佐藤委員】 地震が終わったあと道庁の職員が来まして、その時の報告によれば、中心の震度は4と言っている。しかしそんなもんでない。
- 【不 明】 立っていらなかった。
- 【佐藤委員】 立っていらなくて、棚の本が落ちたり、神棚の飾り道具が落ちた。
- 【久 保 田】 私の記憶では激震だったと思う。両手でもって開けたり閉めたりする戸が勝手に行き来した。そのくらいの地震だったからかなりの地震だったと思う。
- 【佐藤委員】 茶ダンスとかは前に出たりしなかった。
- 【不 明】 茶ダンスなんて持っていなかった。戸棚くらいはあったが。
- 【高 畠】 私の家は馬車が商売だったので長い廊下に米とエン麦の俵なんか積んでありました。それがみんな地震の時に前に出てひっくり返っていた。それを片付けていた時、また地震がきたからルンペンたないで逃げたんです。家と向かいが、高野さんあたりが流された組ですから、結構強く来たと思います。あの辺は。
- 【佐藤委員】 そしてですね、記録によると地震後約35分、10時55分前後に第一波が来襲したこういうふうになっています。海で見ていた須田さんいかがですか。
- 【須 田】 30分くらいです。
- 【佐藤委員】 みなさん大黒島の方から白波が押し寄せてきたと書いてますが。
- 【須 崎】 そこらへんは、直接見ている人ですから詳しい。
- 【小 島】 その当時家にいて薪を切っていた。地震が来てでっかい地震だから津波はおっかないぞと、親父が新潟県だから津波の経験あるわけだ。それで津波っていうのは地震来たからすぐくるんで無いんだぞ、何十分も経って、忘れた頃にやってくるから気をつけよ、よく見てよって言った。それを聞いたから私は、薪を切りながら「カジカケ」の方を見ていた。そしたら、どのくらい時間たってからだかわからないけれど、カジカケのところからウワッと盛り上がり、それから今度は、押されたように波が起きた。家のところで一人で立って見ていた津波は、自分の家のところに来た時はふちの方なのでたいしたことは無かったけど、浜の真ん中辺はものすごい高かった。ものすごい高い波が折れないでそのまま上がってきた。
- 【佐藤委員】 小島さん、カジカギとおっしゃいましたね。

- 【小 島】 カジカケ、瀬がある。
- 【佐藤委員】 どこですか。
- 【須 崎】 床潭の東、東側まっすぐ南、釧路の方に300メートルくらいのところ船のカジがあたるからカジカケっていう。それくらい浅くなっている。
- 【佐藤委員】 船のカジがあたるからカジカケという。こういうふうに瀬がある。そこに波が当たってたの。
- 【小 島】 それを中心とした場所に、そこら辺の水が全部集まってきたという感覚集まってきたのはグワーといっぺんに。
- 【須 崎】 岸からみると、大黒が見えなくなるくらい高い波で、グワーとガバンガバンと折らないで、水面が高くなって押してきた。
- 【須 田】 あの年は冬しばれて、海が凍ってザクでひどかった。それが今度波でもって。
- 【小 島】 ザクは氷で、大きい氷でなく小さい氷。それが今度時化たとき海岸がすごく高くなる。波打ち際が。それでもってだいぶ助かった。
- 【佐藤委員】 それでもって、少し波が砕かれた。波が寄ってくるのを見てたのは、須田さんが漁をしながら、それから薪切りながら、あと高畠さんは。
- 【高 畠】 ルンペン投げるときに外に出て、丁度家の所に川がありますから、そこにも波が上がってきて、その上に船が上がってきました。
- 【佐藤委員】 そうすると、薪を切っていた小島さんは、カジカケの方に吸い寄せられたと思ったら吹き出るように水が広がっていったというお話ですね。須田さんはどんな風に見てましたか。
- 【須 田】 私はその日は北風の中、ちょうど今のカジカケの方向、番外の先を見ながらホッキ漁をしてたんですけど、あそこの先はもう波で。あそこは下まで真っ白な雪だったんですけど雪煙をあげて1メートルから1メートル50くらいの高さでもって波が来たのを覚えています。
- 【佐藤委員】 番外の先というところがあるんですね、そこに行ったんですか。
- 【須 田】 先ですからほんとの岸まで雪があったんです。それが波でもって、雪が吹きあがって、1メートル～1メートル50センチくらいの波でもって、ずーと岸を伝って行ったのを見えています。
- 【佐藤委員】 要するに津波が押し寄せてきて、陸に上がる時。高畠さんは。
- 【高 畠】 ちょうど波が入って来る時、その波がおっきいのとその上に船が乗ってこう陸に上がるところを見て、逃げたんです。
- 【佐藤委員】 ここで、小島さんが見ていた。小島さんはカジカケ、須田さんは番外の先、高畠さんは、この入り口。竹ヶ原さんは。
- 【竹ヶ原】 私は、外から津波だぞと言われて母を連れて、波が押し寄せているもんだから、子供を背中にしょいながら、裏に出るときにひょっと見た時に波が、今でいえば巻胴（注4）まで波が上がってきていた。

【佐藤委員】 巻胴ったら船を上げるやつ。

【竹ケ原】 そう。

【佐藤委員】 だいたい、この地図で道路よりも浜寄り。

【竹ケ原】 そう。

【佐藤委員】 浜は今よりは短い。海岸線は延びてる。

【須崎】 いまより50メートルくらい。

【佐藤委員】 例えば、今より東側が長くなっているとか、西側が減っている、東側は無くなっているとか西側が後退しているとか。そういう言い方するとどっちがどうか。

【高橋】 うちの方は短くなっている。

【佐藤委員】 高橋さんの方は、短くなっている。

【須崎】 そういう言い方されれば短いな。相対的に短いのではないか。

【佐藤委員】 床潭の浜は相対的に短くなっている。でも部分的に長くなっているのは

【高畠】 うちのあたりは長くなっている。

【佐藤委員】 西の方が長くなっていて、東の方が少し短くなっている。

【高畠】 真ん中が一番長い、うちあたりの近所が一番長い。

【不明】 中心地が一番長い。

【高橋】 うちのほうは短くなってるね。

【佐藤委員】 そうすると、よく俗に言ういっぺん津波の前に波が引いていって何とかってことはなかった。海岸線がずーと前の方に行ってそれからという事ではない。

【須田】 引いた記憶は全然ない。

【不明】 引かない、引かない。そのあと、何年か経ってからの津波は引いている。

【佐藤委員】 さっきは、海底についてた綱が引っ張られると言ってたけど、津波の時はそういうことは。

【須田】 いや津波来たときは、もうすぐ上がりましたから、波でもってとめはずして、船立ててワイヤーが伸びて投げてしまったから。あの波の後ろ立ったから、その波が来てしまった。そしてさき（船首）が沖の方に向いてとも（船尾）が陸の方に向いたから、波が上がってすっかりどこの家が潰れたか見えるわけさ。

【佐藤委員】 そうすると地震とわかってその30分のうちに、さあそれと帰ったわけではなかった。

【須田】 商売（ホッキ引き）やってた。
すぐ津波だって分かってそしてすぐ止めたんです。

【佐藤委員】 そうすると、船はけっこうもてあそばれていた。

【須田】 いやー、番外の波を見て止めたわけさ。津波が来ると分かって。
すぐはどめはずして、まえを投げたらもう船はうねりになってきていた。

- 【須 崎】 それは、その船は動力か、無動力か。
- 【須 田】 無動力、0.5 tの手押し。
- 【須 崎】 エンジンかけて逃げたわけではなく、手押しで逃げたのかい。
- 【須 田】 手押し。
- 【不 明】 わしたちのすぐ目の前でやってたからね。
- 【佐藤委員】 そして、家に着いたのは、何分くらいでした。11時過ぎていた。
- 【須 田】 いやいや、過ぎてました。あのとき三杯いたんだから川尻さんのと一杯と、2番地一杯と俺が小松さんとこに、三杯、一緒だったんだそしてとにかくゴメ岩向けて、魯おしたわけさ、そして三杯一緒になった。第一波の時は、川尻さんの家は潰れていないと思ってるわけさ、今でいえば小松さんの家とか真田さんの網倉とか、佐藤さんあの辺の家、波が上がって家にぶつかって。そして、離れるとおっかないから、そしたら今度反対にだし波が出てきて、米びつとかね、葦かけた船（注5）がでてくるしょ。それでもって船ぶつかるのおっかなくて今度ね、表側にあげて逃げてきた。そしたらちょうどゴメ岩のニイカップに先かわることになったら、愛冠からすごいでかい波来たんだよ。それで2番地のところから行って、川尻さんとこの家が潰れたのが、第1回目でないと思うんだ。2回目だと思うんだよな。
- 【不 明】 二回目だね。たら釣り終わってた。
- 小松さんの豚小屋流れて、あれも第2回目で、そして豚が小屋から出て陸へ上がるのを。
- 【須 田】 もうそのころは11時頃、ちょいなってたんでないか。
- 【不 明】 ほっきは家の前でやってたからね。
- 【佐藤委員】 通常は、いつもならそのところから、浜に帰ってくるのに何分ぐらいで帰ってくるんですか。
- 【須 田】 手こぎだから、1時間半ぐらい、2時間近くかかる。
- 【佐藤委員】 そのときは、一生懸命やってたから沖の前には着いたけど、かれこれ小1時間はかかってる。
- 【須 田】 そうです。
- 【佐藤委員】 当時の記録によると、沖合の高さは、当時の水面から5メートルくらい上がったんじゃないかと。海岸に来て波は折れ、波が折れるのは、さっきお話のあったザク氷の役割もあったのかもしれませんが、約2メートルくらいの高さで、内陸にはいつてきたのではないかと、自分の身の丈と比べて。どうですか高畠さん。
- 【高 畠】 なんだか、空まで船がついたような感じで。
- 【田 海】 私が見たのは、へり前でちょうど学校の須崎さんのすぐそばなんです。そして、なんぼか坂になってるんで、うちらの方のこの辺なるね。

ここのとこで主人が薪を切って、あたしが丁度そのそばに。地震が終わった後なもんですから、2人していた。そしたらでっかい波が来て大黒島が見えないんです。いつもだと、そこにいれば大黒見えるんですよ。それが見えない高い波が。そしたら主人が津波だって、そうして、須崎さんの家と親戚なもんですから、須崎さんに入って、須崎さんの女の子横抱きにして私は一人おんぶって逃げたんですよ。そして私らも高島さんの裏山に逃げようと思ったら、私たちよりも先に船が、あの大きな沼に、船の方が何遍も私たちより先に行って、そのうちにこちら辺に家が何軒かあったんですが、その家が2軒か3軒潰れてしまった。その時私は見えなかったけど、その後になって、帰ってきたら津波に流されて跡形もなかった。だからものすごい、私はいまでも津波が焼き付いていて忘れられない。

【佐藤委員】 田海さんのお宅こちらですね。

【田 海】 はい、西側の方です。

【佐藤委員】 今おっしゃられた裏山というのはどの辺ですか。

【田 海】 高島さんの裏側です。みんなそこに避難したんですよ。1番地、2番地、3番地の人は高島さんの裏に。

【不 明】 ほとんどその山に避難した。

【須 崎】 学校挟んで西側の人は、高島さんの山が小高いから、そっちへいった。

【佐藤委員】 ここのところが軸になって、こっち（西）にいった人と、こっち（東）にいった人がいた。火葬場でしたか。この辺。

【不 明】 そうです。

【佐藤委員】 それでは記録によると、この沼めがけて第一波は入ってきたんですか。

【不 明】 そうだと思います。川を伝わって皆川さんって店屋あるんですけど。

【須 崎】 沼の一番はじですよ。そこに向かって学校の生徒が逃げていった氷張ってたから。その上がるか上がらないとこまで、もう津波が入ってた。

【佐藤委員】 そうするとだいたい津波の入ってきた方向としては、ここ湿地ですけど、こういう感じで入っていった。東の方向に入って行った。

【不 明】 当時は、まだ沼に氷が張っていた。それで学校の生徒のほとんどが氷を渡って皆川さんそこへ逃げた。

【須 崎】 その当時、中学2年生の人に聞いて来てる。学校の先生が指示することもできなくて、思い思いに逃げて、今の新校舎の裏手に郵便局に行く通りがあるんですが、そこに橋が一つあるんですよ。早い生徒は橋が壊れないうちに逃げたらしい。また、先生の指示がないから、沼が凍結しているから、沼に直接走っていった。その当時、みんな橋側に逃げなさいと先生の指示があったら、相当ケガ人が出ていたらしい。橋がやられているから。だけど、子供だから早いほうがいいということで沼に向かっ

た。沼は凍結していたから、ぬけた人がそこにいった。

【佐藤委員】 反面で言えば、凍結してたから水の入りも早かったんだろうけど。だいたい水はどのくらい奥までいったもんですか。

【不 明】 皆川さんの道路の左側に家がある。その近くまでいった。いまは山根さんの家のところ。

【佐藤委員】 当時は山根さんの家はなかった。

【不 明】 当時はなかった。

【不 明】 私たちのところは、渚の船あげていたところの川から波がきて川を伝って、船がここまできた。

【佐藤委員】 わかりました、この辺にいっぱい船が並んでたんですね。

【不 明】 はい。

【佐藤委員】 こっちの方も並んでたけど、流された船っていうのは川境にして、どっちかに偏りますか。

【不 明】 両方からいってる。

【佐藤委員】 やっぱり両方からいってる。船があったけど流されなかったのはどのくらいですかね。

【須 崎】 僕らのところは、うねりはあがってきたけど、船はかろうじて引っ張られなかった。

【不 明】 低い川の縁にある船が、絞るようにして川に入ってきた。

【須 崎】 川の縁の船だけが入ってきた。

【不 明】 川伝いに入ってきた。

【佐藤委員】 話しが核心になりますけどね、44戸が吞まれたというふうに言われていますね。この中にも被害にあった方がいらしゃると思うんですけど。被害の集中していたのは、やっぱりこの川のあたりですか。

【不 明】 川の付近です。

【佐々木委員】 結局、今の話があったのは、カジカケの瀬のところに随分かたまりがあったという話と、このあたりに住んでいる方が大黒島がいつも見えるのに、見えなくなったという話がありましたけど。そういう話を全体の上のほうから見た人はいないと思うんですけど、それを総合してある程度推測すると、例えばこういう線ですね。線があるとするこの線のところで海面が、全部一律に5メートルなら5メートルの高さで整然とやってきた津波なのか、それとも東側の方がこのくらいで。真ん中の方が高く不均衡に盛り上がった津波がやってきたっていうのか見当はつきますか。

【高 畠】 2回目って言いますが、私は2回目なんて記憶にない。地震が来て津波なんて私わからないけど、誰かが津波だーって言ったから。

- 【不 明】 あっちは私たちのところより低かったから波にさらわれた。高い方に逃げたから助かった。
- 【佐藤委員】 整理しますけど、第一波は10時55分くらいなんですけど、そのとき皆さんは平地にいるわけですよね。平地にいて、30分前から津波が来るぞっていうので逃げた人もいたかもしれないけど、来たときに逃げたんですね。記録によりますと、臨海実験所が11時10分っていいますから15分後くらいですね。そこに二波が来ましてこのとき3メートルくらい、それから第三波が12時くらいに来て、そのとき2メートルくらいって言ってます。臨海実験所のところで。そこで、その時山の上にいたんでしょうけど二波三波の波が近づいてくるのを見た人はいない。
- 【一 同】 いない、逃げているから。こっちの方にそんな余裕なんてないよ。山に避難してたけど、見てどうなるかっていう人は少ない。もうそこら壊されて流されていた。
- 【佐藤委員】 臨海実験所では、一波と二波は15分、三波は50分くらいということになっているんですが。
- 【高 畠】 うちあたりでは一回目でやられている。
- 【佐藤委員】 被害に遭われた方は、高畠さん、竹ヶ原さん、壊れた、流されたという被害にあった範囲と、もう一つ水をかぶった、水がついた、床上浸水とかそれはどうですか。高畠さんと竹ヶ原さんは壊れたか、流されたかしたのですか。
- 【高 畠】 家は壊れないけども、家の中のものは、水に浸かった。
- 【竹ヶ原】 うち、まるっきり流された。うちの近所は2～3軒流された。中村さんも流された。
- 【佐藤委員】 あと津波に関しての話ありませんか、青年会館っていうのはありませんでしたか。
- 【一 同】 はい、ありました。
- 【須 崎】 今の新校舎の東に100メートルくらいのところに青年会館があった。
- 【佐藤委員】 それでみなさん、コートかなんか来たぐらいで、着の身着のままで逃げたんでしょう。こっちの山か、こっちの山にほとんど全村逃げましたね。そして津波は10時55分だから11時、まだお昼前に第一波が来ましたね。どのくらいの時間かわからないけども、流された人、壊された人、家についた人もいたんですね。いつ頃家へ戻ることになったんですか。
- 【高 畠】 その日は私たちは、山で過ごした。夕方くらいまで。
- 【佐藤委員】 青年会館ともうひとつ学校が避難場所になりましたか。
- 【高 畠】 はい。
- 【不 明】 学校、水は通ったんだけど大したことなかった。
- 【佐藤委員】 位置的には結構危険な所だと思うんですけども、校舎そのものは、冠水

し水がついたくらいで。

- 【不 明】 そんなにいなかったんでないか。川の流れっていうか、水の流れって
いうのか、30センチ高かったらそこをよけて低い方に流れていく。
- 【佐藤委員】 その結果、学校もそう。
- 【須 崎】 1メートル2メートル高いとそこは大丈夫ってわけではない。ちょっと
でも低ければ、強いて言えば10センチでも低ければそちに水は流れて
しまう。学校より沼の方が低かった。だから学校は助かった。
- 【佐藤委員】 それで学校と青年会館は、避難所となることができた。記録によれば4
時頃、役場から毛布だとか布団だとかが届いたということになっていま
すね。夜も丘の上にいたわけではないんでしょ。
- 【高 畠】 はい、私たちはそこが親戚ですから。
- 【佐藤委員】 学校の子供たちは何時頃家に帰ったんですか。
- 【須 崎】 その日たまたま、学校で中学校を増設する会議か統廃合の会議が多分そ
の日にあって、親父たちは学校にいたんです。昔は、高等小学校、それ
から中学が三年制になるということで校舎を一つ増やしてる。その会議
か、それとも、その後すぐ厚岸との統廃合っていう問題で、その会議に
当時の有力者っていう人が10人か15人集まって学校の職員室で会議開
いている時間帯。だからうちの親父が帰って来たのは、三時過ぎ。その
間裏山で避難してたのか。学校に帰って来てたのか。
- 【不 明】 父さん家にいたんだ、それから晩になってから高島さんの倉に行って一
晩泊まってきた。
- 【不 明】 あの当時、わたちはお寺に逃げて、住宅の方は被害なかった。
地震が何度か来た情報はなんも入らない、今と違って。強い余震が
来るもんだから何も持たないで逃げた。
- 【須 崎】 小島さんや佐藤さん、あんたたちの裏山の今工事やってるところ。ほと
んどあの裏山に逃げた。
- 【小 島】 ほとんど裏山だ。
- 【佐藤委員】 こっちは裏山ですか。名前はついているんですか。
- 【不 明】 私たちは、遠藤さんの山って言ってた。
- 【佐藤委員】 二晩も寝た。
- 【不 明】 結局、家の中帰られないから、むしろをしょって上がって。
- 【佐藤委員】 そうしますと、学校と青年会館は、少し高くてあまり水は着かなかった
ので避難所として使えた。そして4時頃来てということでしたが、家に
自分の落ち着き先を見つけたのは何時ぐらいですか。
- 【不 明】 わしらは高島さんの裏山、ほんとのちょっとの違いで高い方に逃げた
けど、家のすぐ裏に山田さんっていう家があったんです。その奥さんは
裏山に逃げないで、その波の来る川の方に逃げたんです。

そしたら、私たちが落ち着いて降りてきたでしょ。そしたら、その奥さんが女の子を一人おんぶして、手を血だらけにしていた。それでどうしたんですかと聞くと、裏山の方に逃げないで、津波だっていうんで低い川の方に逃げたんですと。そしたら流木、丸太と丸太に挟まっちゃったんですと。そして、手を見たら血だらけだった。

【佐々木委員】 第二波、第三波と繰り返しあったと思いますけど、被害の状況からみて、第一波と比べて大ききみたいなものわかったら聞きたいのですが。

【不 明】 家の父が、それこそ昔のもんですから和船のコンブ船、実家でその船一艘しかなかったんですよね。そしてみんな高島さんの裏山へ逃げたでしょう。そしたら、大きな津波の引いたあとに家の父が、その船がいたましくて、ロープをもってきてどっかに縛りに浜に下がって行くんですよ。そして私らが行ったらまた津波が来るから行くなと言ったんです。一艘しかない。貧乏なもんですから。流されたら困ると。その時に、まだ家の船は、浜の中間のこの辺にあったんです。そしたら第一波か第二波だか三波だかわかんないけど、ちょうどこの辺まで来たんですよ。

【佐藤委員】 二波、三波による被害、二波、三波による思い出、恐怖。

【不 明】 二波だか三波かわかんないけど来たんですよ。

【佐藤委員】 須田さんは筑紫恋に帰ったんだ。

【須 田】 そうです。

【佐藤委員】 どうりで時間かかり過ぎるなと思いました。そうすると、基本的には第一波で大きく被害を受けた。高さは、範囲は沼をかすめるかかすめない程度で山の方にぶつかったらしいんですが、高さは記憶ないですか。学校の高さどの位あったんでしたか。

【不 明】 学校は床上までいかないんでないか。

【佐藤委員】 学校は床が濡れなかったのですぐ使えた。要するに掃除したとかそんなことあったら結構かかりますよね。

【高 畠】 学校は入ってなかった。

【竹ケ原】 学校は逃れたよね。

【高 畠】 うちの家財道具学校に預かった。

【佐藤委員】 これってどのくらい高さありました。ザク氷。

【須 崎】 背丈だけあるかないか。

【不 明】 いやいや、背丈でできない。

そばに行けばもう海見えないくらい。そしたら2メートル50センチくらいあったんでないか。

【佐藤委員】 津波にぶつかったけど、結構崩れるとかしないで。

【不 明】 沼にもり上がってた。

【佐藤委員】 結構、防波堤の役割してた。

【不 明】 してたと思う。

【佐藤委員】 それが無かったらもっと被害がひどかったかもしれない。

【不 明】 そうだと思います。

【不 明】 私たちのところは、今は家の前に道路あるけど、当時道路なかったから家の前、すぐそばまできた。

【佐藤委員】 この通りが先にあって、これは後からできた今の道路だね。

【不 明】 今の道路だね。

【佐藤委員】 通りとしては、こっちの方が広いみたいだけどね。私も、ここの宮下さんというお宅はしょっちゅう来たんですけど。バスに乗って帰るので。じゃあ、二波、三波は、数回にわたって来たけども、二波、三波による被害は、すごいなっていう印象はあんまり無い。

【不 明】 ないね。津波来たって裏山に逃げたからね。それから浜見るから、そしたら番外の先の方引いていったから。引いていった時にまた津波来るぞーって、言えば山に上がって行くから。順々、順々に山に上がって行くから。

【佐藤委員】 その第一波が来たときは海は引いていったという印象はないけれども、来た後はやっぱり、結構やっぱり砂地、浜出たもんですか。先までいきましたか。

【不 明】 出ました。

【佐藤委員】 須田さんも床潭の浜に上がろうというつもりは無かった。

【須 田】 なかったです。

【不 明】 第一波の後、かなり引きましたよ。私ここに長く住んでいるけどね。見たこと無い岩が見えました。

【佐藤委員】 大潮の比でない。大潮ってここはどの位引くんですか。

【不 明】 2メートル50センチ位も下げるかね。

【佐藤委員】 海面が2メートル50センチ位下がって、浜が少し20メートルか30メートル出る。

【不 明】 そう、潮引くときは何十メートルって引きますよ。大潮になればね。

【佐藤委員】 それを見ていたけど。それよりも。

【不 明】 なんも、だってねカジカケって瀬、そこまで歩いていけるんだからね。

【佐藤委員】 さっきの話では300メートル位あるって聞いたけど、その位引いた。

【不 明】 それをだいたい2回位やってますね。

【須 崎】 地震来て遠藤さんの裁縫を教えてた家から、女の子が窓から飛び出たと言っていたけど、そこのかあさんっていう人は、当時男の子その子を抱いてね、津波の後、海の途中まで流された。

【不 明】 流された。

- 【須 崎】 その船を巻く巻胴って言って、それで船巻くんだけどね。そこまで子供と二人で流されて行って、その巻胴につかまった。本当は流されたんだけど、そこにつかまったから助かった。
- 【佐藤委員】 小島さん何か今お話あったようですけど。
- 【小 島】 一波が来た後、ずーっと下げていきましたよ。それはそれは、カジカケって話出ましたけどね。そのカジカケまで歩いていけるくらい潮下げていきましたよ。2回あったもそれ。
- 【佐藤委員】 2回あった。
- 【小 島】 1回で引いて行ってね、また上がってきて、また来た時は、そうだな、台風でいったらどの位のかな、かなりいい台風の時に波あがるでしょ。そのくらいのとこまで波が、水が上がってきた。ただ水が上がってくるだけだから。
- 【須 崎】 台風のように沖がジャーと白くなって折ってくる。
- 【小 島】 いや。
- 【須 崎】 水が引いたまんま、来る。
- 【小 島】 静かなもんだったよ。そしてね、ザーっと下げて、そして上げてきたんだけどね。このときは少しいいシケだになって、この位だったね。だいたい、海の波で言えば5メートルくらいの波。
- 【須 崎】 津波来て、一波目で壊された、そして、二波目はやはりおっきい台風くらいの床潭に来るような波、三波目はまあ台風で今日は波出るぞっていうくらいの波。
- 【小 島】 そうそう。それで後は、だいたい収まったようなもんですね。こっちの方は8番地って言ってましたけどね。8番地の方でね、波があっこのカジカケから入ってくるには、北西に向かって入ってくるんですよ。そして俺の見た波はね、北西よりもまだ、むしろ沖の方から、南東よりも、まだ南の方に寄ったところから来てるような感じだね。
- 【佐藤委員】 こういう感じで入っていた。
- 【小 島】 そうだね。そして、家の建っている裏山をなめっていったようなかっこうなんです。シャーっとなめっていったような感じ。小松さん通り越してね、遠藤さんの本家あの人の家をなめってそして鈴木さんのところをなめって、中村さんあんたの前あたりに行ってるんですよ。
- 【中 村】 うん、来ました。
- 【小 島】 それでそれを抜けて行って、今度は川のところから、再度上がって来てるんです。
- 【須 崎】 小島さんが言うには、波の差が何秒か何分かの違いだけど、まず8番地に一番先に波がつけて、こうなぞりながら磯谷さんのあそこら辺にいて、それからまた川の方に押してった。

- 【小 島】 いったん8番地に上がった波がね、その佐田さんのあそこら辺から抜けて、その抜けた波が、再度波を形成して、その川から上がった。
- 【佐藤委員】 磯谷さんというお宅があったんですか。
- 【須 崎】 小松さんあたりの。
- 【中嶋委員】 今、番外のそのあたりの。
- 【須 崎】 だから8番地の方からやられてきた。何秒かの違いだろうけどね
- 【佐藤委員】 高さは、身の丈基準ですけど通りを越えてくるんですからね。
- 【須 崎】 家の前でもって大黒島が見えないくらいの高さで来たって言うんだから5メートルも7メートルもあったんでないですか。
- 【佐藤委員】 一応記録では、5メートル位それに比べてわからないのは、二波、三波の波の高さがわからない。小島さん、第一波が5メートル位としたら、そのあとはどれくらいでしょうかね。そう言ったら、誘導尋問になってしまいますか。
- 【小 島】 いや台風で言うとね、第二波の津波が来たあたりまで上がってくるとしたら、ものすごい大きな台風ですよ。波は、7～8メートルの波でないとこないから。この歳だから、気圧がなんぼだから波はどの位かそういう予想がつきますから。
- 【佐藤委員】 あ、3年くらい前の敬老の日前後に大きな嵐があったじゃないですか、あの時の波わかりますか。
- 【不 明】 あれよりはでかい。
- 【小 島】 雨降って風吹くと、それと秋になるとかわせ（注6）っていうのが吹く。いままで南から来てたのが、風が変わって北から来る。この風がすごいんですよ。これが北西にあればたいしたこと無いんですが、南西に変わってね、かわせの風だったら真っ向に入ってくるからものすごいでかい波ですよ。
- 【佐藤委員】 津波も、やっぱりその方角から波がきましたか。
- 【小 島】 いや、津波は南東側から来ている。
- 【須 崎】 8番地の方からなめってきた。
- 【佐藤委員】 南東って言うのは、波の方向に向かっていうんですね。背中じゃなくてね。
- 【須 崎】 波が向かって来る方向。床潭で言うと小島、あれが南東です。
- 【佐藤委員】 さて本当は、もう一つテーマがあるんですが、そうしますと、2日から3日避難所もしくは、親戚の所にお世話になってだいたい戻って、被害にあった人はその建物の整理にあたったということになりますか。町の方は、こちらの方で議会が写真を写してますが、当時おいでになった議員さんが、室崎さんのお父さんがお撮りになった写真ですけども、議会はあそこでやったんですか。臨時議会を現場でやってますね。
- 【不 明】 室崎さんのお父さんでしたか。

- 【須 崎】 ちょうどあの頃、協同組合の組合長選挙があった。津波の時は阿部庄太郎さんで、4月1日付けで選挙があり、床潭出身の佐藤安一さんは敗れて、野村さんが二期やった。その後佐藤さんがやった。その一同がすぐ津波の後きてね、ちょっと大型の船だったもんで浜までロープつけてね下げてもらった。
- 【佐藤委員】 久保田さんお話はありませんか。
- 【久 保 田】 わしは、波は全然。ただびっくりしてどこにも出れないで、学校のそばの須崎さんの畑の上で、動けなかった。それから、須崎さんの家にいて世話になった。
- 【佐藤委員】 しばらく、引いていくのに時間かかったようですね。
- 【久 保 田】 伊藤さんの家みんな潰れたから、そこが深くて須崎さんの家いくとき、ここまで漕いで行った。それからしばらくして高島さんの蔵さ行った。
- 【須 崎】 明治時代に小さい川だったところが、今になっても雨降ると川になる。
- 【佐藤委員】 せっかくの機会ですから、ここでいうことっていう、地震に関するお話ありませんか。
- 【室崎委員】 一番最初の地震について戻るんだけど、先ほど佐藤先生の方から話があったけれど、仏壇だとか神棚とかそういうのは地震の時どんな状態になりました。
- 【高 畠】 1回目の地震では、みんな落ちていました。
- 【室崎委員】 この前釧路沖地震あったけど、結構揺れましたよね。あの時と比べてどうですか。
- 【不 明】 あんなもんでない。
- 【不 明】 7、8はあった。
- 【不 明】 4ではきかない。
- 【不 明】 こんな細い棒につかまってるくらいだから。
- 【不 明】 震度なら7くらいあったんでないか。
- 【室崎委員】 例えば押し入れのところに、からかみなんかあったでしょう。あれはどうですか。
- 【不 明】 からかみは外れて倒れてましたね。
- 【室崎委員】 この前の釧路沖地震の比ではなかったんですね。歩けなかった。
- 【不 明】 歩けなかった。地震はこうでない（横）こうだった（縦）。足が下に着かない。
- 【佐藤委員】 つまり、平成5年1月の成人の日にあった地震と、6年の10月に震度6の地震があったんですけど、平成5年の成人の日よりもはるかに揺れが大きかった。震度4と5、6ではだいぶ違いますからね。
- 【不 明】 今まで体験した中では最高の地震だね。
- 【不 明】 地震で壊れたっていうのは聞かなかった。津波では流されたけど。

【室崎委員】 ほとんどは平屋ですね。

【不 明】 そう。

【不 明】 27年の年だからまだまだ復興にはほど遠いから。雪降ればむしろぶら下げて隙間から雪が入ってこないようにそういう家だった。

【佐藤委員】 当時だったら、冬場なら結構襖なんか動かないくらい重くてね、止まっていたと思うんだけどね。

【佐藤委員】 今日は時間がなくなったからできませんけど、その頃の家の間取りとか、屋馬鈴薯を食べようと思ってたとか、逃げて歩いた時の服装とか、そういうのをちょっとお伺いしようと思うんですが。

【一 同】 そのまんま、着たまんま。

【須 崎】 僕はまだ21か22歳だったんだけど、タビ履いていた。朝起きて、靴下でなく。年寄りおんぶって、高島さんのところに逃げてついたら倒れたから、津波ってというのはどんなものか全然見ていない。

【佐藤委員】 あとですね、昭和35年のチリ沖のときはこちらはいかがだったんですか。

【不 明】 潮はかなり引いたな。

【不 明】 被害は無かったね。

【佐藤委員】 被害は無かったけど、潮は引いた。

【不 明】 あときは朝だった。

【佐藤委員】 4時45分です。

【不 明】 その時は、海の中の岩は見たこともない岩が見えた。

【佐藤委員】 300メートルもっといったか。さっきのカジカケよりも。

【不 明】 十勝沖津波よりも、チリ沖の方が小さい島まで出たと思う。

【佐藤委員】 もっと引いた。

【不 明】 はい。引きましたね。それこそ8番地から小島まで歩いて行けるくらい引いた。

【佐藤委員】 だけど潮位は上がらなかった。

【不 明】 浜中方面の方はかなり被害があった。

【須 崎】 何年だ。

【佐藤委員】 35年5月24日、1960年です。田海さんのように、朝起きておやっと異変に気がついた人と、まだ知らないでいる人とに分かれるんだ。委員さんのほうで何か聞いてくださる。ほかに私どもが調べているのは、まず、昭和27年3月の衣食住、これを調べたい。その頃あって無くなった地名、集落、床潭には該当しないかもしれないけど。今言った何とかの裏山とか、遠藤さんの山とか、そういう地名などを調べております。カード渡したら書き込んでくださいますかね。その時の家はこんな間取りだったとか。茶の間があってストーブがあって、奥の方に畳の部屋2つあってとか。

【須 崎】 そのくらいだったら。

【佐藤委員】 そうですか、後でお願いするかと思いますから。委員さん何かありませんか。無ければ帰りませんか。

【宮崎委員】 その当時、被害にあったとき役場ではどのような援助をしてくれたか。記憶ありましたら。

【高 畠】 私は商売が馬車屋でしたので、ちょうど1歳の子供がおりました。豆腐屋さんが、厚岸の豆腐運んでおりましたから、その家でおむつを頂きましたのでほんとに助かりました。晩方、役場の方から学校で物資配給しますからと子供さんは子供さんがいるようなものもらったり毛布もらったり本当に助かりました。

【不 明】 私ももらいにきました。学校にね。

【高 畠】 今はもう津波だったらああやって来るから。昔でしたから助かりました

【池田委員】 炊き出しや何かはなかったんですか。

【不 明】 なかったですね。

【佐藤委員】 毛布だとか寝具だとか、やっぱり当時は保険もなかったしね、家倒れてもね。

【不 明】 何日か経ってから公住建ててもらいましたけどね。

【佐藤委員】 位置は多分図面があると思いますから。

【室崎委員】 あと、佐藤先生の方からおっしゃった様に、まだまだ今日のはいわば総論みたいなもので聞きたいことは沢山あるんですよ。

例えば昭和27年頃どんな暮らしをしていましたか、なんて言ったら覚えてないんですよ。だけでもあの日っていうとみんな覚えているんですよ。あの日を一つの基準にして、町史なんか作る中では。どうしても町史っていうのは行政文書っていうのか、何月何日町長がどこ行ったっていうのは残っているから、そういうことが中心になりがちなんですけど、そうじゃなくて、やっぱりその時みんながどういう暮らしをしていたかっていうのをきちんと残したいんです。例えば、今、ごしょ芋食べてたなんて話も今の若い人たちはわからないですよ。やっぱり、きちんと教えて残していかなければならない。そういう意味でも非常に大事な記録だと思うんです。だから例えば角巻、防寒服なのかももう既にオーバーになってたのか、そういうことがあの日ならわかると思うんです。それから、コンブの結束一つとっても今と違いますものね。そういうものをこれからいろんな機会に町史あるいは、町のほうから来て皆さんに教えて頂きたいと思いますので、今後ともどうかよろしくお願いいたします。

* 当資料は町史編纂資料に若干の文言精査をしています。

<語句注釈>

(注1) 二尋半：15尺（4.545メートル）

「尋」：水深などをはかる長さの単位

1 尋＝6尺（1.818メートル）

(注2) ホッキひき

マンガン（爪が5・6本ついたバケット）を巻き上げてすくう漁法で、当時は人力で巻き上げていた。

(注3) ルンペンストーブ

昭和初期に北海道を中心に使われたストーブ。燃料は主に石炭や薪などで、これを円筒状のストーブ内に詰め込み上から着火する。火力の調整は本体下部にある空気取り入れ口の開き具合で調整していた。

(注4) 巻胴（まきど）：

漁船を海から引き上げる道具。

中央の穴に丸太を通し、数人の

人力で回りながら巻き上げる。



巻胴

(注5) 葦かけた船：葦を使って冬囲いをした船。

(注6) かわせ：風向きが変わるときに使う言葉。

「あい」：北寄りの風、「やませ」：東寄りの風、「ひかた」：南西の風